

## 冬朝

本莊中学校 P N 晴雨

ばちん

頭の中で何かが弾けた音がした。と共に私の目はぱちりと開かれた。

それは冬、初明かりが過ぎていく日か経っていて、いつもより薄い昼の匂いと、布団のぬくもりと、外気に触れた顔を覆う冷たさを同時に感じる頃であった。触れる冷気が耐えられずもう一度寝入ろうかと布団に頭を突っ込んだ。

眠れない。先ほどの音で脳はすっかりと目覚め、瞳はものを見んとし、長く閉じていることさえ億劫に感じさせていた。

このまま横になっていてもただ眠れず怠惰と暇を待て余すだけ。だが、このぬくもりを手放し極寒の布団の外においそれとは行く気になれず暫く考えこんでいた。

ふと、私は冬の朝日を見たくなった。先程までの葛藤は何であったのか、そこからの行動は早く、勢いよく布団から飛び起きた。抱いて寝ていた半纏にいそいと袖を通しぺたぺたと足裏を冷氣で刺激しながら板張りの廊下を進む。

なんとなく、拝むのならば二階が良いと考え、灯りすら付けず障子を通す薄い日の光を頼りに階段を登って行った。その頃にはとうに、足裏の感覚は消えていた。

勢いに任せ、南向きの書斎に駆け込み、障子の窓を開けた。

目を細めた。其処には今まさに昇り始めた太陽が居た。地平線に一部を防がれようと、その煌々とした光は起き抜けの人間の目を焼くには十分で、私は何度目も目を瞬かせた。書斎全体が冬日を浴び心なしか輝いているように見えた。

暫くその光を眺めていたら、音と共に肌を裂くような冷たさが襲った。目を見開いて驚きはっと意識が戻った。

慌てて窓を閉め、とんとんと階段を下る。何となく勝手場に向かい、電球を一つ付けた。時計を確認すると既に卯の刻は過ぎていて、朝餉には丁度良い時間であった。

意識すると腹が減った。昨日土鍋で水に浸しておいた米を火窯で炊く。火が安定する合間に食べ合わせを作り、また火を見るを繰り返す。

よし、高菜や漬物、鰹節なんてのも入れた豪華な握り飯が完成した。我ながら良い出来だと頷き、茶を淹れる。握り飯とともに盆に乗せ、居間にある炬燵へと持って行く。手間ではあるが、身体は冷やしたく無いのでね。

ひたひた歩いて着いてすぐ、炬燵の机上に盆を乗せた。目の前には温かい食事、潜っているのは暖かい炬燵、こんな幸せが他にあらうか。

「おやつ、こなつ、そこに居たのかい」

うなん、と一匹の猫が私の足元で鳴く。猫は、のそのそと炬燵から出てきて、私の隣に身を寄せるように香箱型で落ち着いた。口元が緩む。

愛猫の頭を撫で、いよいよ食事に向き合った。そっと手を合わせ、静かに呟く。

「いただきます」

早速握り飯を手に取り口に運ぶ。米はもちもち、漬物もよく味が染みていて旨い。ほっとするような味とあたたかさに浸っていると、ちよいとちよいと、と呼びかけられた。

こなつだ。そういえばまだご飯を食べていないんだったね。私は鯉節の握り飯を半分に割り、ほぐし、取り皿に入れ、こなつの前に置いてやった。

うなん、とひと鳴きした後、美味そうに食べるこなつを見て自然と嬉しくなる。

握り飯を頬張りながらふと、考える。

そういえば私は今日どんな夢を見たのだったか。確か子供の頃の夢だったような、近所の子供達と一緒に独楽を回したり、けんけんばをしたり、三目並べもやっていたな。だんだん思い出してきた。そのあと、何か不思議なものが皆の前に現れたのだ。

それは遅れてやってきた子供の一人が握っていて、たしか、赤い球体が紐につながってぶかぶか浮いてなんだか風みたいだなんて思ったのを覚えてる。そう、私はそれを珍しく思っただけで触れなくなっただけだ。人差し指をそおと近づけて。

触れたら、こんな音が出た気がする。

ばちん